慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『近代艶隠者』と西鶴：『懐硯』との関連
Sub Title	Saikaku and his Kindaiyasainja
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西村享教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『近代艶隠者』と西鶴

――『懐硯』との関連――

檜谷昭彦

1　貞享三年の西鶴

西鷺軒橋泉という隠者風の人物が書き置いた『近代艶隠者』は、井原西鶴の文学活動に関わるいくつかの接点を有する作品であり、多くの関心が寄せられながら、従来論究されること少なかった作品であった(1)。本稿もその内容には考究できず研究への前提を提示するにとどまるはずだが、現在の時点で、本書に関する筆者の関心のありようを可能な限り整理して報告してみたいと考えている。以下、まず基本的事項を列記することから始めたい。

それはまず貞享三年(一六八六)、西鶴四五歳の一年間の動向に関わっている。事実の確認として、『近代艶隠者』という書物は、題簽外題の角書に「扶桑」の二字を冠している。つぎに、本書は西鶴自身の自画自筆(板下清書)として刊行された。第三に、本書の上梓は大坂の書肆、河内屋善兵衛によるものである。以上三点を前提事項に据える。

つぎに当年の西鶴文学活動を確認するうえで、前年度からの動向を左に略記する。

貞享二年(一六八五)　四四歳

七月一六日　宇治加賀掾の段物集『小竹集』に序文を書く。これについては後述するが、以後この歳に西鶴の作品はなにもない(後述のa項を参照)。

貞享三年(一六八六)　四五歳

一月　『近代艶隠者』刊序文を書き、しかも西鶴自画自筆の板下という力の入れようであった。

二月上旬　『好色五人女』刊　版元　大坂森田庄太郎。これは前年二月二一日に上梓した『大坂堺筋椀久一世の物語』と同一版元である。

六月中旬　『好色一代女』刊　版元　岡田三郎右衛門。版元岡田は、貞享元年(一六八四)四月、『好色二代男諸艶大鑑』出版において、新進作家西鶴の述作をはじめて手掛けた書肆である。それは、西鶴という俳諧師が、草子作者として大坂の有力出版書肆に認知されたという証左でもある。さらに言えば、書肆森田庄太郎もそうだった。前年(貞享二年)、森田は西鶴に『椀久一世の物語』を、あえて私に言えば、書かせている。これも後述のa項にゆずる。つまり私が言いたいのは、この歳あたりから、井原西鶴には、大坂の有力出版書肆が散文作家としての西鶴に注目し、作品を要請、刊行をうながしていたという状況があったということである。そう読み取れる西鶴年譜が、ここにあるということだ。

一一月　『本朝二十不孝』成る。但し、刊行は翌年の貞享四年正月、このとき改めて序文を書く。版元に岡田三郎右衛門が加わっている。

同一一月　田中玄順撰『本朝列仙伝』刊行。本書の挿絵は井原西鶴ではないかといわれている。野間光辰氏はその著『補訂西鶴年譜考證』(中央公論社刊、昭58・11)において、以下のように述べられている。

この『本朝列仙伝』の挿絵については、漆山天童氏はこれを蒔絵師源三郎筆といふ。もしそれが事実ならば、従来西鶴自画と認められてゐるものは、すべて源三郎筆と改められなければならない。しかし私は水谷不倒氏の説に従つて、やはり初期西鶴本の挿絵は西鶴自画と考へ、これと酷似してゐる本書の挿絵も、西鶴画くところと見

たいと思ふ。(同書326頁)と。

貞享四年(一六八七)　四六歳

一月　『男色大鑑』刊　版元　大坂深江屋太郎兵衛・京都山崎屋市兵衛相版。

三月上旬　『一宿道人懐硯』刊　版元　現存本は刊記を欠くゆえ未詳。

四月　『諸国敵討武道伝来記』刊　版元　江戸萬屋清兵衛・大坂岡田三郎右衛門相版。岡田三郎右衛門と西鶴の作品上梓は、この時期きわめて密接であったことが、ここから認められるし、他方、森田庄太郎と西鶴の著作出版についての関係も翌貞享五年(一六八八)、九月三〇日改元、元禄元年正月の、『日本永代蔵大福新長者教』出版によってみれば、前記岡田三郎右衛門と同趣の様態であること明白だろう。

なお、是歳貞享四年一月(前述)の『男色大鑑』の版元深江屋太郎兵衛については、西鶴との仲きわめて濃く、延宝年中の西鶴俳書出版からの関係であって、著名な『西鶴大矢数』(延宝九年一六八一、九月二九日改元、天和元年、西鶴四〇歳、四月刊行)の版元であることをみても理解されよう。さらに言えばこの深江屋は、延宝八年(一六八〇)西鶴三九歳の年の五月、西鶴の俳友片岡旨恕の俳書『俳諧備前海月』一冊を出版した。本書は野間光辰氏の前述『年譜考證』(以下このように略称する)によれば、

原本題簽下に割書して「破邪顕正返答之評判、同返答自註之再評」とある通り、是歳三月下旬に出版せられた惟中の『俳諧破邪顕正評判之返答百韻自註』に対する再評である。

つまり本書は、同門の岡西惟中の俳諧論に慊らず、あまつさえ、惟中が西鶴の付句を窃んでいるのではないかと暴露した俳論書であった。本書の作者片岡旨恕については後述のb項を参照せられたい。元に戻る。こうして筆者が申し述べたいのは、当歳、西鶴の周辺には、大坂のすぐれて活性化した書肆が蝟集しはじめていたという状況の確認である。では翌五月の動向はどうか。

五月　『西行撰集抄』刊　版元　大坂河内屋善兵衛。挿絵西鶴自筆。版元河内屋は、本論当初に述べたごとく『近代艶隠者』の同一版元であり、さらに本書でも西鶴は挿絵を担当しているのである。『近代艶隠者』と『西行撰集抄』

と。両書に関わる西鶴本人の関心・興味はなにか。これもひとつの考察点となろうか。さきを急ぐ。

九月一一日　『好色旅日記』刊　版元　京都吉野屋次郎兵衛。本書は前引の片岡旨恕の作と目されている。ここに挙げたのは、前述した理由と、本書に西鶴の発句が引用されていることなどの事由による。本作品についてはすでに筆者に小論がある(2)。

そしてこれ以後、当年西鶴の文学活動はない。西鶴本人の創作活動だけに限定して考えると、この年四月の『武道伝来記』執筆刊行までで、以後八カ月間、西鶴は沈黙を守ったということになる。

以上、貞享三年次の井原西鶴の文学活動を、主として彼の創作物とその出版書肆、それらをめぐる西鶴にごく近い俳諧師らの動静に注目して整理してみた。もとより焦点を『近代艶隠者』に当てていることは言を俟たない。課題は当期における『近代艶隠者』の位置であろう。

2　西鶴と西鷺と玄順と元順

筆者はかつて近世文学における兼好の『徒然草』享受を考勘した。そのときわけても啓発を得たのは中村幸彦氏と関場武氏の論考であった(3)。両氏および多くの諸説から得た筆者なりの、近世『徒然草』享受の位相は、私なりに過去に書いている(4)。いまだにそれ以上に考えはさほど進展していないものの、いまその稿を左に述べる。これは旧稿の書き直しゆえ、引用文の体裁をとらせていただいた。

近世の文壇という見地からすれば、漢詩文に遊ぶもの、狂歌・俳諧に携わるもの、笑話・雑談を語るもの、堂上の和歌や古典の講読をたのしむものなどなど、多くの知識人が、堂上と地下と、武家と僧侶とが、戦後の太平を愉し

んでいたと考えて至当であろう。たとえばである。石川丈山や鈴木正三のような、徳川家康に仕えた三河以来の旧臣のひにくれ武士は、おそらく史実からみても家康以上に矜恃が高かったろうことだから、幕藩体制下に身を置くことなどできるわけもなかった。関ガ原で負けた側の牢人衆ばかりでなく、徳川方にだって、さらに戦後の政治体制に参画することに懸念をもつ輩は多くいた。彼らは家康をふくめた行政職に或る種の異和感をもっていたのだろう。もういいや的・放っておけ的、嫌悪感ないし悔蔑感と言ってもよい。

戦後である。たまたま教養があり財があったとき、これらの人士は戦後の世の中を、無責任に見てやろう、勝手に生きてやろう、自己なりに考えてみよう式の諦観をもったのである。そのとき彼らの思考は中世の隠者を志向した。その感想は、市中に深く身をひそめて風流をたのしみ、閑寂の境と世俗の人情とのはざまで、隠逸の士でありたいとする念(おもい)を持った。だがそれは、鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』が語る〈隠逸の境界〉を、きわめて近世的に読み直した世界ではあった。言っておくが中世がそのまま近世へなだれ込んだのではない。そういう思考は私のとるところではない。

従来の文学史の記述はこれを無視した。中世文学の歌学・随筆の傾向を、そのまま近世の知識人が盲従したとする錯覚である。現今ようやく認められる近世和歌への探究の風潮は、上述の過去の誤謬をやがて溶いてくれるのではないか。

というのである。

以上の私の考察を支えたのは二条良基の『近来風躰抄』の指摘による。同書では兼好について、「其比は頓・慶・兼三人いづれも〳〵、上手といはれしなり」(中黒点は論者が付した)と述べ、さらに「兼好は此中に、ちとをとりたるやうに人も存ぜしやらん」と評し、または「ちと俳諧の体をぞよみし」と記している。詳しい論証は省くことにするが、ここには明らかに中世の歌人兼好を、俳諧に遊ぶ風雅の士として認知している言説が読みとれるのである。

ちとをとりたる—中略—ちと俳諧の体をぞよみし

という歌人が『徒然草』の作者であり、それが二条良基の兼好認識であった。

こういう兼好像は、近世初・中期の知識人には好意的に迎えられた。これについても少しく述べたところだが(5)、ここでは、『近代艶隠者』刊行に至る位相を簡略に述べることから始めよう。

深草元政の『扶桑隠逸伝』は寛文四年(一六六四)に上梓された。これについては後述するところがある。読耕斎林靖の『本朝遯史』も同年秋の刊である。それ以前万治四年(一六六一)には野間三竹の『古今隠逸伝』が上梓される。貞享三年刊の『近代艶隠者』は以上の先行書に影響を受けて出版されたとみるのが妥当だろう。その序文を井原西鶴は書いた。そこには、いわゆる近世的な隠者志向がありありと読みとれるのである。では『近代艶隠者』における西鶴の序文はどうなのか。左に抄出してみる。

宵は時雨して、軒ちかき板屋に、冬をはじめてしらす。万の草も一とせのうちに、生死を見する。枯野につれて、人の心も次第に、山の眠がごとし。—中略—、世の世をおもふに、何かめづらしからず、鳥に口ばしありはねあり、鳴も飛も心にまかすべし。人ながら人程替りたるものはなしと、無常を隣に、夢を我宿に語る時、笹の網戸を、せはしく音信に累れて、皆枕をそば立、松の嵐よりはと明出れば、旅姿の法師、笠もとりあへず、命があれば二たびと、泪衣に包む。旧来声は聞馴て、替る形に驚ず。いつなるらん難波を別れ、諸国に心の行、日数を今おもへば、五年の其神無月になりぬ。—下略—(傍点論者)

まず右の文は、時雨・板屋・冬の始、など、『定本西鶴全集』の頭註を参照しても判るように、中世和歌の歌句を利用

して、世の定めなさを語り、次に「人の心も次第に山の眠がごとし」、と云う。それは時節が冬になって、人に万物が「生死を見せ」、「枯野」をあらわすのにつれて、「人の心」が山が眠るようにおさまったというので、ここでは「人の心」がなかなか落ち着かなかった状況を序文の筆者は気にしていたことになる。このことは後半の「人ながら人程替りたるものはなし」という文言と照応するし、次文、「無常を隣に、夢を我宿に語る」という筆者の意識にも対応するだろう。多くは言わぬが、西鶴は、だから「無常」を外に置いて、「夢」を誰かと語ったのである。

で、文は、人ほど変化自在なものはないと人の世を観じていたら、そこへ西鷺軒橋泉が五年ぶりに突然訪ねてきたというのである。かれ橋泉は法師姿で諸国行脚の旅に出ていたという。このあたりの文にも中世和歌の援用は多様であるが略に従う。

そこで問題になるのは、右に言う五年前の神無月であろう。五年まえの旧暦十月、西鶴はなにをしていたか。『近代艶隠者』の出版はなんども言うように貞享三年正月である。序文を信ずれば五年前の神無月は、橋泉が西鶴を訪ねたのが貞享二年十月だから、当然一六八〇年で、延宝八年十月であらねばならない。

私は前章の貞享四年一月刊『男色大鑑』の項で申し述べたごとく、延宝八年五月には、片岡旨恕が『俳諧備前海月』を出版して岡西惟中を論難し西鶴を擁護したと述べた。当歳西鶴はあの『西鶴大矢数』四千句を成就した(五月七・八日)年でもある。とすれば当年の西鶴と橋泉の交渉はきわめて濃かったとみてもよい。

野間氏の『年譜考證』は貞享元年(一六八四)八月二八日の尾張鳴海の下里知足宛書状から、西鶴と西鷺との師友関係を明示する。すなわち、「然者西鷺事、其御地ニ御念比ニ被遊被下、悉奉存候」(天理図書館蔵、一紙)という文面である。詳しくは野間氏の『年譜考證』等によられたい。従って西鷺軒橋泉が、延宝八年(一六八〇)の冬に西鶴と別れてから、貞享

元年(一六四)秋に鳴海に知足を訪ねるあいだ、西鶴と音信を通じていたことは、これで明白である。橋泉は西鶴の俳友であった。

つぎに西鶴は延宝二年(一六七四)三三歳の春、江戸談林の俳諧師野口在色と出会ったとき(これは在色が西山宗因に入門するためだったのだが、じつは在色は幕府の重要な要務をかかえていた)、西鶴はすでに江戸の談林派と意思疎通していたと筆者は考える。

いま詳考は略すが、野間氏の『年譜考證』や『徳川実紀』などによれば、野口在色が西下した理由は明らかである。『年譜考證』からの孫引きだが私に労を省いたわけではない。

長野県上伊那郡教育会編の『俳諧解脱抄』(野口在色撰)には、やや長い引用になるが、

予壮年をこへて、遠江浜松の社頭の事有て公の仰を蒙り、備前国福山に行て、其事終れば、立春を得たり。——以下カッコ内は野間氏の要約による——。(吉備津の社参詣、細谷川・有木の別所など一見の後乗船、牛窓を経て高砂に着船し、それより陸行して明石・須磨・兵庫・西宮各地の名所旧跡を巡歴、大阪に入る)。大阪に帰り天満に行て、宗因の方丈を尋ね侍るに、僕も見へず、炉に炭はあれども、書棚もなし。此人は八歳より歌学に入て、世にふれし連歌の師也。誹諧もことなき作者にて、誹名は難波の梅翁と呼けり。しばらく物がたりして予発句、

継穂にはゆるせ難波の梅法師

是をしるしに師に仰がんと乞ければ、こよなふ祝ひ給ひき。旅宿しばしの中、梅翁連誹の門弟、境の玄順、茶臼山の隠士道寸、西鶴など出会て、百韵四五席終りぬ。(傍点筆者)

とある。右、引用文中「境の玄順」とあるのは、野間光辰氏によれば、堺の南元順(方由)のことであるとする。それは

それでよい。南元順は中村俊定氏によれば、俳書『四人法師』(延宝六年か、撰者那波葎宿(りつしゅく)等)の中に、独吟百韻を収録された俳諧師で、さらに言えば、寛文一〇年(一六七〇)刊の俳書『寛伍集』(横本四冊)の撰者であった(『俳諧大辞典』、明治書院刊)。

右『寛伍集』出刊の寛文一〇年、西鶴年譜は空白である。考察を元に戻す。

延宝二年、西鶴は江戸談林派の野口在色と会っていた(前出)。それは春のことだった。以上、事項が輻輳してきた。焦点を明確にしよう。

3　項目別の整理

a項　貞享二年、西鶴は宇治加賀掾のために書いた浄璃瑠『暦』興行のあと、前述のごとく段物集『小竹集』に序文を書いた。これは八月六日刊。書肆は京の山本九兵衛(加賀掾の浄璃瑠本は多くここから出版され、西鶴の『暦』も同じだった)ではなくて、西鶴ゆかりの森田庄太郎である。近松と西鶴の競合とか、西鶴側の敗北とか従来論じられてきた右の状況は、しかし、『小竹集』上梓の事情をみるかぎり、さまで西鶴に痛手がなかったように思われる。七月一六日に序を書いたあと、五カ月も沈黙して、西鶴はまず『近代艶隠者』の板下浄書に勉めたのである。

さらに、これよりさき、二月二一日、西鶴は右の森田から『大坂堺筋』椀久一世の物語』を上梓した。本作が大和屋甚兵衛の当たり狂言『椀久』初演の当て込みをねらったものであることは、従来の研究からほぼ決定的である。つまりここには思うさま浄璃瑠の世界に遊弋(ゆうよく)する西鶴をみるのであり、それを支えた出版者森田の志向がうかがわれるということである。

b項　片岡旨恕については、人丸御影供の行事主宰者として知られ、連歌師、のちに歌人として大坂で著名であっ

た。その交友関係は広く、京坂の文人を多くふくみ、俳諧師とか浮世草子作者というよりも、むしろ歌人としての自負を有した人であったと考えてよい。その人に『好色旅日記』の述作上梓がある。いま梗概は省略するが、近世社会の民俗的風習と民間信仰を逆手にとって、伊勢参宮における性的禁忌を侵犯する冒険が、どのようないきさつを生むかを描いた作品である。それは、性的にきわめてむごたらしく、すぐれて古典的旅行記風で、記述は歌枕を俳諧に変容した、新趣向の作品であった。はたして片岡旨恕が作者かどうかは判然としないが、状況証拠はそれに近い。さらに、なによりもここで確認しておきたいのは、左に引く野間氏の提言である。

そして本書の伊勢道中・東海道中の案内記事は、西鶴の『一目玉鉾』(元禄二年刊)に先行するものとして、極めて注目に値するものがある(『年譜考證』343頁参照)。

つまり西鶴の地誌『一目玉鉾』は旨恕の『好色旅日記』にも影響を受けたということである。なお『一目玉鉾』については拙稿を御参照願いたい(6)。『好色旅日記』は前述のように歌枕を俳諧に変えたのだが、他方『一目玉鉾』は全篇が和歌の引用に終始していることを付言しておく。西鶴は日本全土の地誌を、俳諧の祖である和歌に戻って描いたことになる。この意味を私は重くみたい。

以上、貞享三年の西鶴およびその周辺の動静を論者の視点から提示した。ここでそれらをいくつかの部類に分けて整理することにする。一は西鶴浮世草子の述作のありようであり、二は『近代艶隠者』をめぐる西鶴の関心の状況であり、三は貞享四年三月刊の『一宿道人懐硯』述作への私なりの追跡である。

一、はじめに西鶴本の刊行年譜によって示したごとく、この時期西鶴は流行作家であり、その作品は『好色五人女』・『好色一代女』(貞享三年)、『男色大鑑』(貞享四年)等で、いわゆる〈好色物〉の浮世草子が並ぶのである。貞享三年には好色本差し止め令が出たという臆説がいまでも流れていることを含めて、当期の西鶴はまさに好色物浮世草子作家としてのイメージがまことに顕著である。右の三作品と『本朝二十不孝』(貞享四年一月刊)は、いずれも盛行し、西鶴の

名を高からしめた。文学史上無視できぬ作品であること自明である。いわばこの時期の西鶴は好色本作者だった。これはいままでの西鶴像として現在でも通用する文学史的認識と言ってもよい。ところがである。私による西鶴年譜の読み方に従えば、そこに〈もうひとりの西鶴〉が見えるように思われる。それが次項に説く西鶴の中世文学への執心である。

二、右に述べた貞享三年次を中心とする西鶴の出版活動には、もうひとつの流れがあったことはすでに説いたところによって明らかであろう。再度まとめて言えば、貞享二年に西鶴は近松と浄瑠璃劇作を競ったのち、同年七月以来沈黙した。五ヵ月を経て、翌三年正月に『近代艶隠者』の序文を書き、自画自筆の板下で本書は出版された。著者である俳友西鷺の本書によほどの関心があったとみるべきだろう。同三年一一月玄順の『本朝列仙伝』が上梓される。挿絵は西鶴である。

さらに、貞享四年三月『一宿道人懐硯』刊。西鶴作としてまちがいない。本書の出版書肆は不明で、今後初版本の発見を待つ他ない。そうではあるが、右に述べた出版書肆の状況からして、森田庄太郎・岡田三郎右衛門・深江屋太郎兵衛などの書肆と、河内屋善兵衛らがその版元として当然考えられて然るべきだろう。状況証拠ばかりで反論も多かろうが、いま少し私の推定を申し述べる。

右『懐硯』刊行のあと、西鶴は四月に『武道伝来記』を上梓し、次いで五月『西行撰集抄』が刊行された。挿絵は前述のごとく西鶴である。以上を左に例示してみる。

貞享三年

正月　『近代艶隠者』刊　序文・本文挿絵とも西鶴自筆自画　版元　河内屋

一一月　『本朝列仙伝』刊　挿絵　西鶴自画

貞享四年

三月　『懐硯』刊　西鶴自序　挿絵は吉田半兵衛風　版元不明

五月　『西行撰集抄』刊　挿絵　西鶴自画　版元　河内屋

貞享五年(元禄元年)

正月　『日本永代蔵』刊

のようになる。ここにみられるのは自作『懐硯』と『日本永代蔵』をのぞいて他作者の作品への関与であり、その姿勢は積極的であると認めてもよい。しかしながら、貞享四年の三月と五月における『懐硯』と『西行撰集抄』刊行の間の、四月に出刊した『武道伝来記』については、その性格がだいぶ異なること自明である。これについては次の機会を俟ちたいが、同年一月刊の『本朝二十不孝』とともに、この時期、西鶴には中国渡来の「稗史」や通俗史書類への関心も旺盛だったことへの証左ともなる。これらについてはいま私に述べるだけの資料が不足している。いずれ、同学・先学の学説を待って考えたい。

そこで、元に戻ると、ここに居る西鶴は明らかに隠者文学志向とは考えられまいか。『小竹集』序文を書いたあと、五ヵ月も逼塞して、『近代艶隠者』の出刊に積極的に参加する。一一月には(その間一〇ヵ月)『本朝列仙伝』にも参与する。さらに翌年五月『西行撰集抄』出版には又しても挿絵作者として登場するのだ。そしてそのあいだに、西鶴は『懐硯』という廻国行脚の僧の見聞譚を出版しているのである。これはこの時期、西鶴には中世文学以来の隠者文学への関心があった証左と認めざるを得ぬ事実だと考える他はない。

再度言う。前年貞享二年度には、そのまえから持続したあれほどの浄璃瑠への情熱を、西鶴は五ヵ月の沈黙のあとに、こんどは西鶯軒橋泉の作品上梓に協力することによってさらりと消去したのだろうか。そう考えるとき貞享四年正月に上梓した『男色大鑑』が、今後きわめて重要な作品研究の課題になってくる。それは爾後の問題であるが、作品成立年譜上から見えてくる当年の西鶴の意識(ないしは姿勢)は、流行作家であり浮世草子の創始者(好色物で有名になった的な世俗の風潮)でありつつ、その裏面で、中世文学から持続する〈隠者文学〉への大きな関わりと深い享受とを表わしているということになる。私にはかつて書いたいくつかの論考があるからいまは省略させていただくが、それは現代の作家による明治期文学の領略と言ってもいいが、いわば西鶴にとって、中世文学は自家薬籠中の分野だったのである。

つまり以上の事象は、そうした西鶴の志向が生んだ『近代艶隠者』以降の隠者伝出版への積極的な参加だったと私は考える。ひとくちに元禄文学といわれる、西鶴・芭蕉・近松を中心とする近世文芸の内実が、それぞれの独創と摂取によって、中世文学をいかに読み取り、新たに更生して行ったかを私たちは探るべきではないか。その問題のひとつの解答が、ここにはあって、西鶴自身による試みが、じつは『一宿道人懐硯』の作品内容ではなかったか、と私は考えているのである。

三、寛文元年(一六六一)丑林鐘(六月)、京都の書肆村上勘兵衛から出版された『本朝法華伝』三巻本は、深草元政の著作に成るものであり、漢文体の記述で、同じ著者による『扶桑隠逸伝』(前述のように寛文四年刊)は、右の作と深く関わるし、『本朝法華伝』あってこそ生まれた作品と考えてもよい。その『本朝法華伝』巻二「聖応第七」の「行空法師」の項は、以下のような内容である。全文を引く。漢字は現行のものに改めた。

釈行空世称二一宿上人一。所レ居不レ経二両夜一。以レ故五一畿七一道無レ不レ行一遍一。随レ身之資具。三一衣猶不レ全。況其余乎。只法華一一部而已。昼読六一部。夜亦爾。行一旅之間。或迷レ路天一童示レ之。渇一乏時天女与レ水。若病苦天一薬自至。欠レ供廿一露現前。年九一十歿二鎮西一。臨一終天一衣自纏レ身。蓮華承二雙足一。普賢文殊降一現摩一頂云。生平所レ誦三十余万部。

つぎに当代よりはるか後年刊行された、享保四年(一七一九)板の平仮名本『本朝法華伝』(絵入、京、平楽寺蔵版)の、該当部分を引用する。カッコ内は私の読みを示す。

行空法師

行空は。世に一宿上人とぞ申ける。おる所二夜を。明さゞりけるゆへ也。さるあいだ。五畿七道。行めぐらずといふ跡なし。身にもつ所。三衣だにまたからず。只法花経。壱部のみなり。昼六部夜六部づゝなんよみけり。或は山路にまよへば。天童出来て。道をしめし。のんど。かはけば。天女あらはれて。水をあたへ。もし病にくるしめば。天薬をのつからいたり。飢にのぞめば。甘露たちまち現じけり年九十にて。鎮西におはりけり。臨終に天衣くだりて。身をまとひ。蓮花おひ出て。足をうけ。普賢文殊影向し給ひて。いたゞきをなで給へりけり。およそ一生に。誦する所の法花経。三十余万部なりけり(以上、近世文芸資料15、島原泰雄氏編『深草元政集』第三巻・第四巻、古典文庫刊、昭52・11・10、昭53・2・10、による)

以上、二例の引用文によって私が推測するのは、貞享四年三月の序文を有する西鶴の『一宿道人懐硯』との関連である。本書は現存本で検する限り改題本の疑いが濃い。さらに本書は元禄以降『匹身物語』(改題本)、『筆のはつぞめ』(改竄本、宝永二年正月)のように版元も未詳な形で流布して行った。だが、本書題簽角書が示す「一宿道人」はおそらく初版からの命名であろうと考えてよい。右『懐硯』についてもすでに小論があるが(7)、ここでは別の角度からその西鶴序文を再度

読み返したい。

雨の夜草庵の中の楽しみも旅しらぬ人の詞にや。亦、人のいへるあり、「しらぬ山、しらぬ海も、旅こそ師匠なれ」と。我朝〳〵わらんじのあたらしきをたのみ、夕〳〵ゆたんのあかなるゝをわざにて、おくはそとの浜風を身にふれ、こさふく夷がほこりにもまぶれ、にしは「親にもつげよ」といひし嶋守とも身をなし、生の松原・箱崎の並木のかずもよみおぼゆるに、或はおかしく、或は心にとまる人の咄しを、くきみじかき筆して、旅せぬ人にと如左。

（対訳西鶴全集五、『西鶴諸国ばなし・懐硯』麻生磯次・冨士昭雄氏訳注、明治書院刊、昭50・8・25、による）

以上、三例を引いた。ここには「一宿上人」「一宿道人」「行空法師」という三つの名が見出せた。

深草元政の『扶桑隠逸伝』（寛文四年刊）は、同者撰の『本朝法華伝』（寛文元年刊）の類書であり、それらを享けて橋泉の『近代艶隠者』が成ったことは、すでに識者の説くところである。『近代艶隠者』題簽の角書に「扶桑」の二字があることも前述した。こうした類似の書を井原西鶴は精力的に支援し出版に関与した。その西鶴に『一宿道人懐硯』の述作がやがて生まれる。その間、『本朝列仙伝』（貞享三年刊）があり、『懐硯』上梓と相俟って『西行撰集抄』が刊行される。その間二ヵ月、構想・執筆としては同時平行と考えてよい。右三例の資料からしても状況証拠はほぼ調ったとは言えまいか。

『懐硯』の主人公伴山という半俗半僧の人物は、本書題簽角書には〈一宿道人〉とあった。元政の『本朝法華伝』の「行空法師」の項には「一宿上人」と称したとあった。行空も伴山も日本国中を遍歴して倦まなかったという。かくして西鶴は行空を読んでいたのではなかったか。

4　もうひとりの西鶴

本稿では好色物作家として時代の有名人となった西鶴が、その側面で中世文学の随筆系統に深い興味をそそぎ、じつは近世散文界に新しい隠者像を形象しようと意図したのではないか、という問題を提示した。しかしながら資料の例示にとどめ、とくにそれへの読解と他の関連資料にも言及しなかった。従って、ここに描いた西鶴像は、ことによれば筆者の恣意的なものであるかも知れない。

ただ私としては、中世文学における吉田兼好の『徒然草』から、さまざまな隠者像を追い続け、同時に多くの和歌文学を咀嚼して、作品のなかに活用した井原西鶴という作家に、こうした視点からの新しい研究が後続して欲しいと念うだけである。本稿は依頼されたもので、時日にも多少の齟齬があった。それは弁解にすぎないが、いずれ他日を期すことにしたい。御批判を仰ぎたいと念じている。

〔注〕

(1) 野間光辰氏「近代艶隠者の考察」其の一、其の二、(京都帝国大学国文学会『国語・国文』昭11・8月・9月、のち、『西鶴新新攷』岩波書店刊、昭56・8・24に再再録)、の他、管見では吉江久弥氏の「『近代艶隠者』と霊岩洞」(西鶴人ごころの文学』、昭63・10、和泉書院刊)などの他多くを知らない。

(2) 「名所記・評判記と浮世草子――好色旅日記をめぐって――」(民俗文学講座第六巻『近世文芸と民俗』所収、弘文堂刊、昭35・2・10)を御参照くださらば幸甚である。

(3) 中村幸彦氏「徒然草受容史」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂刊、昭32・12)、関場武氏「徒然草の影響・享受と研究史――近世前期を中心に――」(『国文学解釈と鑑賞』昭45・3、至文堂刊)

(4) 檜谷「後世への影響――あわせて西鶴作品との関連について――」(諸説一覧叢書『徒然草』、明治書院刊、昭45、および

「徒然草の享受史」（『徒然草講座』第四巻、有精堂刊、昭49・11）を御参照ありたい。小論はそこで、西鶴の『徒然草』への関心と、書肆深江屋太郎兵衛との関わりにも言及した。しかしこの問題については、補説としての役割にすぎず、主論文のテーマとなり得ていない。

（5）前記注4の小論を御参照せられたい。

（6）小論「『一目玉鉾』の世界」（『国語と国文学』、昭62・7、東京大学国語国文学会、至文堂、のちに檜谷著の『西鶴論の周辺』（三弥井書店刊、昭63・7・25に収録）

（7）小論「『懐硯』の行方――諸国物語の終熄」（拙著『井原西鶴研究』所収（三弥書店刊、昭54・11・30）参照。

〔筆者注〕

『近代艶隠者』の内容とその先行書との関わりと、さらには深草元政と西鶯軒橋泉との接点とか、論じなければならない問題は多くあった。とくに『懐硯』の成立については考えねばならぬことがまだ多い。本論はそうした視点に立って、いちおうの視界を展いてみたにすぎない。雑務のため、旬日をおく作業となり、作文上、論理の通らぬ点もあろうかとおもう。御寛容を願いたい。（昭和63年11月2日）